

東海の紡織技術史(1)

手紡ぎと手織りの技術

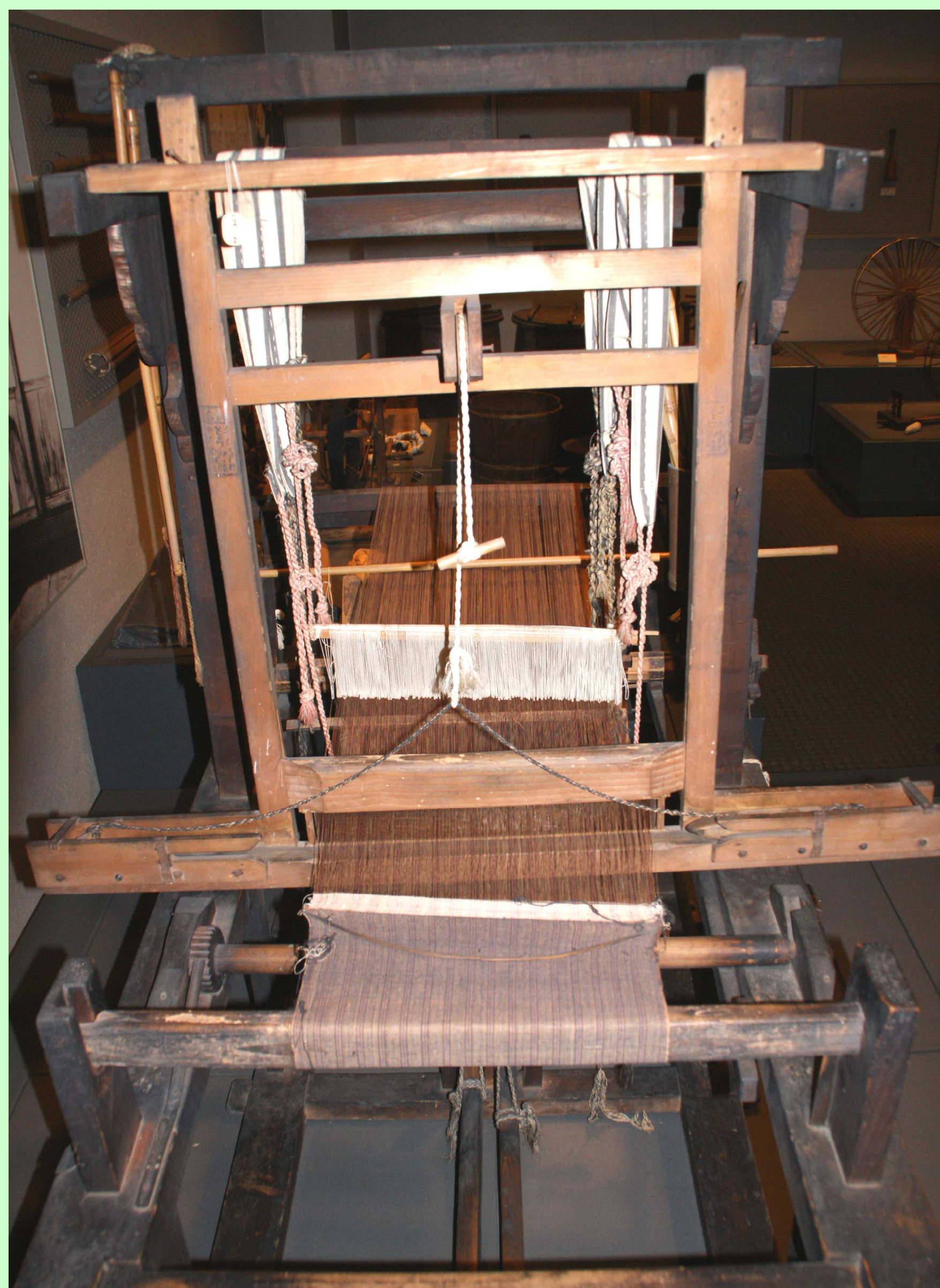
幕末の薩摩藩が西洋の機械紡績機、動力織機を輸入するまで、わが国では綿布(木綿)をつくる技術はすべて手作業であった。綿繰りされた綿を精綿する道具には綿打弓が使われ、綿打ちされた綿を束ねてよりことし、よりこから糸にする道具は糸車であった。

織機は、江戸時代は高機や地機が使われていた。明治5年(1872)、京都西陣の織工佐倉常七、井上伊平らは、フランス・リヨンに派遣され、ジャガード2台、ボタン20框を帰国時に持ち帰った。ボタンとは、イギリスのジョン・ケイ(John Kay)が1733年に発明した「飛杼(Wheeled Shuttle)」のことで、織布作業の能率を二倍にした技術である。高機に取り付けてボタン付織機として広く普及した。豊田佐吉はこのボタン付織機を改良し、箒打ちと飛杼を連動させた木製人力織機を1890年に発明し、動力織機国産化への助走路とった。ここでは、日本の綿織物をつくる技術とヨーロッパの毛織物をつくる手仕事の技術を比較してみよう。

綿糸・綿織物の技術



糸車による手紡ぎ(作業は高木宏子氏)



日本のボタン付高機(蒲郡市博物館蔵)

毛糸・毛織物の技術



手紡ぎ(Quarry Bank Mill)



イギリスのボタン付織機(Quarry Bank Mill)